

仙台高専卒 モンゴル出身・バイラルさん 宮城・美里の企業入社

「母国で起業」

夢を温め 技術磨く



切削チームの一員として大型マシニングセンタを操作するバイラルさん＝8月22日、宮城県美里町のキョーユー

モンゴル出身のバイラルさん(22)は、バイラルバータルさん(22)が今春、仙台高専専攻科を卒業して精密機械加工のキョーユー(宮城県美里町)に入社した。将来は母国で起業する夢を温めながら、ものづくりの現場で懸命に学んでいる。(大崎総局・村上浩康)

バイラルさんはモンゴルの高専を卒業後の2020年4月、仙台高専専攻科に編入学した。新型コロナウイルスの感染拡大と重なり、当初は慣れない環境でのオンライン授業に苦労も多かった。それでも、対面授業の再開とともに学習内容の理解が進み、生産

システムデザイン工学専攻を無事に2年で終えた。発展を目指す母国に自身の将来を重ねる。「いつかは帰国して、日本での経験を生かして自分の会社を設立したい」。キョーユーにはモンゴルの高専在学中の18年、視察で訪れた縁があった。就職活動では、胸の内を正直に伝えた。

東日本(大衡村)の発足当初から同社と共同研究を重ね、独自の金型を開発。航空宇宙分野にも新規参入するなど意欲的な取り組みで知られる。外国人雇用は今回が初めて、バイラルさんの思いを理解した上で採用に踏み切った。事業推進室の高橋真紀主任は「とてもまじめで実直。恥ずかしがり屋だけど、ポテンシャル

高精度金属加工に従事

はもともと高い。きつと母国で活躍する人材になる。私たちが隣にあるように身近になったと話す。

切削チームに配属されたバイラルさん。高性能の工作機で高精度の高い金属加工などに従事する。「最初は分からないことばかりだったが、だんだん慣れてきた。美里町は

仙台より静かで、モンゴルみたい」。休日は仙台市などにいる同胞とバスケットボールで汗を流すのが息抜きだ。「いろいろなことを学びたい。たくさん経験するために、10年以上は働きたい」。夢の実現に向け、まずは会社の力になろうと成長を続ける。

仙台高専が橋渡しし 大崎の官民組織と連携

人材育成を望むモンゴル、人手不足に悩む中小企業。双方のニーズを橋渡ししようと、仙台高専は2020年度からモンゴルの高専から編入生を受け入れている。今春卒業した3人のうち2人が宮城県内の企業に就職。特にバイラルさんの事例では、大崎地域の官民でつくる「未来産業創造おおさき(MSO、大崎市)との連携が実を結び、モデルケースとして期待されている。

モンゴルは豊かな鉱物資源を抱える一方、工業技術が立ち遅れており、産業発展に不可欠な人材育成に力を入れている。かつて国費留学生として仙台高専で学んだ教育科学相(当時)らが中心となり14年、日本をモデルにした高専3校を開設。19年には初の卒業生を輩出した。

一層の技術習得や現場経験を求めるモンゴル側の要請を受け、仙台高専は

「人材迎え入れモデルに」

18年からMSOと連携して地元企業の視察や研修受け入れを展開。20年からの編入生受け入れにつながった。MSOの事務局がある大崎市は、モンゴル出身で大相撲の宮城野親方(元横綱白鵬)が観光大使を務める縁もある。MSOの加藤義徳総括コーディネーターは「中小企業が卒業生を採用するのも難しい時代。技能実習生のような一時的な形ではなく、モンゴルの優秀な人材を迎え入れて20年、30年先を見据えた関係をつくりたい」と説明する。

仙台高専でプロジェクトを担当する小林仁教授は「キョーユーのような力のある中堅企業への入社がモデルケースになり、県内企業にモンゴルとのネットワークが構築できたらいい。企業側、モンゴル側がウィンウィンの関係を今後も続けたい」と期待する。